

## 第4章 陶磁器研究を文化交渉学に応用するために ～九州・沖縄地方を例に～

西村昌也

### 1. はじめに

現在我々が日常生活で利用する茶碗や湯飲み、どんぶりなどの大半は、陶土等の選良された土を原料にして、窯などで高火度焼成を行ったものである。これらを一般的に陶磁器と呼ぶが、その初現は、日本列島では高火度焼成施設（窖窯）とその製品である須恵器の出現（5世紀：古墳時代）に置くのが一般的であろう。

そして、発生期において朝鮮半島からの技術導入、あるいは植民に伴う技術移転を前提として開始された日本列島の陶磁器史は、先天的に朝鮮半島あるいは中国からの技術移転や模倣を宿命づけられていたようだ。これは、最新の放射性炭素測定年代値に基づく15000年前後の縄文時代初現期あるいは旧石器時代末にまで遡る、縄文式土器以来の、“いわゆる素焼きの土器”とは異なる命運を有していたことになる。

その背景には、陶磁器は定型的で、大量に生産され、かつ硬質な器質をもち、ときには高い美術・工芸的価値を求められることにもなるため、高度かつ組織的な生産技術を前提にしないと成立しないことが挙げられる。また、その耐久性、工芸的・美術的価値ゆえ、所有者の権威や権力を象徴する威信材や家産となり、遠距間の交易や贈答の対象にもされてきた。

本稿では、「文化交渉学」の形成に寄与すべく、陶磁器の研究が、文化交渉学においてどのように応用できるのか、どのような視点で分析・研究を進めるべきなのかを、九州・沖縄地域の地域性や歴史的伝統などにも留意しながら幾つかの例を紹介してみたい。

尚、本論は陶磁器研究を専門としない方達を読者の中心に想定したものであるので、専門性の高い事象や精緻な議論を、簡素化あるいは平易化している。また、筆者自身九州・沖縄地方の陶磁器研究の専門ではなく、細かな学術議論を追補仕切れてないところも多い。ただし、本論はそうした個別問題に特化した学術議論の成熟化を目指すものではなく、上記の文化交渉学における陶磁器研究の役割を明確化することにある。

## 2. 考古学資料を理解するために：陶磁器研究、特に年代論、流通論は、考古学研究からの発言が主体

日本の人文科学研究においては陶磁器研究の出発は美術や美術史的立場からの研究が先行していたが、1970年代頃から開発工事に伴う緊急発掘調査を通じて、福岡・太宰府・大阪・京都・東京などでの都市・都城遺跡（消費地遺跡）から出土する陶磁器片が考古学資料として正確に扱われるようになった。こうした発掘調査では、中国や朝鮮さらには東南アジアやヨーロッパから当時輸入された陶磁器と日本で生産された陶磁器や土器が、遺跡の各種の遺構（墓、建物跡、埋納坑）で出土し、生産地の異なる陶磁器が遺物群としてまとまって発見されることにより、ある時間軸上の定点で共存していたことが確認されるようになった<sup>1)</sup>。

また、これと並行して各古窯（生産地遺跡）の発掘調査により、具体的な陶磁器製品の生産地が同定可能となってきた。また、<sup>ものほら</sup>灰原（焼成失敗品などを集中的に捨てた場所）の正確な発掘調査により、同一系統における製品の形態や文様の変遷（考古学の型式学や美術史の様式論の議論基礎となるもの）が明らかにされるようになった。

特に、政庁が位置した太宰府では、早くから組織的かつ問題意識をもった発掘調査が進められ、奈良・平安時代から室町時代に亘る非常に長期間の陶磁器編年案（消費地編年）が提出されてきた。森田勉・山本信夫<sup>2)</sup>などを中心とした太宰府遺跡での調査メンバーが組み立ててきた“太宰府編年”は日本考古学の陶磁器研究の最高到達点の一つで、現在まで中国陶磁を中心とする貿易陶磁編年の基礎議論となっている。さらには、その成果でもって中国などの外国陶磁の生産年代も推定可能となり、東南アジアやアフリカなど他地域での出土遺跡での年代判定に非常に大きな貢献をし、まさに世界の陶磁器編年として寄与してきたことになる。中国産陶磁器だから、中国考古学で細かい陶磁器の編年研究が進んでいるというわけではなく、紀年銘を持つ陶磁器や紀年資料を伴う墓の副葬品や一括埋納品としての陶磁器群以外さしたる編年資料さえないというのが現状である。

また、近世においては九州の各窯址での発掘調査の積み重ねから、生産地編年が組み立てられている。九州近世陶磁学会編の『九州陶磁の編年』では、県別に具体例がわかりやすく示されているが、驚嘆すべきは肥前陶磁の場合、器種単位での編年が確立されており、17世紀の碗皿資料に関しては、最小で10

1) 近年の代表的な例は、重要文化財指定された琉球首里城京の内SK01土坑出土の中国・タイ・ベトナム陶磁器群がある（沖縄県教育委員会1998年『首里城跡——京の内跡発掘報告書（I）』。亀井明德編『明代前半期陶磁器の研究——首里城——京の内SK01出土品』専修大学）。これは1459年に火災にあった倉庫に収蔵されていた陶磁器群と考えられ、首里城内郭に位置していることから、琉球王朝の儀礼・祭祀に用いられた非常に貴重な陶磁器と考えられている。また、阿蘇大宮司の居館であった熊本県矢部「浜の館」の埋納土坑から出土した、中国・華南地方で生産された三彩陶器（鳥型水注、瓶）や緑釉陶（水注）を含む陶磁器群は、1584年の島津氏侵攻に伴う緊急埋納と推定されている。当然、1584年までに利用されていた特殊な陶器群熊本県教育委員会1978年「浜の館 阿蘇大宮司居館跡 熊本県文化財調査報告書21集」。こうした資料は、遺構の形成された年代（1459年や1584年）より以前の陶磁器が含まれていることを示しており、陶磁器資料の年代の下限はこれにより押さえられるが、年代の上限は遺構の情報から引き出すことはできない。

2) 参照：山本信夫 2000年『太宰府条坊跡 XV ——陶磁器分類編——』太宰府市教育委員会

年単位での実年代と照合された編年が完成していることである<sup>3)</sup>。これは考古学においては編年の極限值ともいえるもので、日本の近世陶磁編年の重要な軸になっている。有田の陶磁器研究を推し進めてきた大橋康二・野上建紀氏ら在地の研究者を賞賛せずにはおれない。

### 3. 資料の性格、研究の方法、歴史的思考との対応性において注意すべきこと

遺跡から出土する陶磁器や陶磁器を伴う遺跡は、その年代がかなり細かく同定できることになったことにより、文献資料が言及していない歴史や文化の諸側面を復元できる可能性をもっている。ただし、そのための方法論とその限界を知っておく必要もあろう。以下、当時研究のデータを利用するにあたって注意すべき事象について列挙しておく。

1. 陶磁器（遺物）の年代が、即、建物や城（遺跡・遺構）等の年代とはならない。伝世や後世の様々な生活活動などにより、後代に形成された遺跡や遺構に、前代の資料が混入することはよくある。あくまでも、その遺構に共伴する遺物の中で最も年代の遅いものが、その遺構を形成した年代に最も近い（同一とは限らない）と考えなくてはいけない。

2. 考古学はアセンブリッジ（群、まとまり）で思考する学問である。遺構や遺跡から出土する遺物を“群”として認識し、そこに年代の下限（ある時間軸上の定点以前）を与えるのが最初の作業である。そして、その遺物群が形成された意味を考えることになる（例：意図的な埋納、生活時の廃棄、生産時の廃棄（灰原）、建築時の造成など）。さらに、遺物群の器種組成（碗、皿、壺などの比率）、生産地組成（肥前、瀬戸、景德鎮、広東・福建など生産地別の比率）、年代組成などを分析することになる。当然、こうした遺物群は“1630年代から1680年代の間に納まる”といったように、ある程度の年代幅をもって時期比定されるのが普通であり、その年代幅を含みおきして、歴史事象に考察を反映する必要がある。

3. 遺物に関わった“人”（生産者、運搬者、所有者、利用者など）を個人や家族レベルで抽出するのは非常に困難を伴う。ただし、出土した遺物の属性や出土した状況、関係文献資料を加味して、そうした情報に迫っていくことはある程度可能である。

4. 陶磁器（遺物）は、商品化や贈答品、あるいは日常生活品としてしばしば運搬されるものであるが、あるタイプの陶磁器があるからといって、出土地とその陶磁器の生産地などとの間に直接的関係（外交や文化的交渉、商業関係）が存在した場合は、非常に限られている。商品あるいは日常の生活具として考えた場合に、それらがどこの生産品であるかという属性よりも、使いやすいとか、丈夫であるとか、きれいであるといった属性が優先される場合がほとんどであるからだ。

5. 考古学の宿命として、ある資料が“ない”から、ないとは言明できない。本特集号に関連する例で挙げると、16世紀のベトナム陶磁<sup>4)</sup>の出土は、九州島では、つい最近までまったく認知されていなか

3) 野上建紀 2002年『近世肥前窯業生産機構論——現代地場産業の基盤形成に関する研究——』（金沢大学提出博士論文など参照）

4) 近年の九州・沖縄での東南アジア産陶磁器の出土状況は、東南アジア考古学会編 2004年『シンポジウム 陶磁器が語る交流——九州・沖縄から出土した東南アジア産陶磁器——』に詳しい。

ったものである(本紀要、西野論文参照)。しかし、大分の大友府内遺跡で大量出土し、長崎や大分県の発掘でも確認され始めている。従って、将来の発掘調査で出てくることもしばしばあるため、最新の研究や発掘データを追補しておく必要がある。おそらく、文献史学などより研究の変転・流転の速度が非常に速いことを理解しておく必要がある。

#### 4. 原料がもたらす要因

陶磁器は、良質な原料(陶土・カオリン)や燃料(薪など)がないと、生産できないという宿命を背負っている。逆にそれらさえ入手できるなら、どこでも生産できるものといえる。

18世紀後半、九州を中心に四国砥部なども含んで、磁器窯が多く開窯する現象が認められるが、これは天草陶石の広範な流通が可能にした現象と考えられている<sup>5)</sup>。もともと有田周辺では泉山陶石が、一元的に管理され良質な原料を独占することにより有田などでの高級磁器生産に優越性が保たれていたのだが、より質の良い天草陶石が開拓され、流通ルートに乗ると状況は一変する。

1796年時点において、筑前(須恵皿山)、筑後(黒崎皿山)、肥後(大田皿山)、薩摩(川内[平佐]皿山)、伊予(伊予国皿山)、安芸国(広島皿山)などで、天草陶石を原料とした磁器生産が行われており、19世紀前半には、五島、長崎、福岡県浮羽町、大分県臼杵市や緒方町などで生産が開始されている<sup>6)</sup>。つまり肥前佐賀領以外における磁器生産において、天草陶石が果たした役割がきわめて大きかったといえよう。当然、こうした陶石の販売・移入に伴う文化交流なども存在したはずである。

#### 5. 生産者・販売ならびに運搬者・使用者の違い

伊万里、広東省東部の汕頭(欧米では<sup>スワトウ</sup>Swatow)、ビルマの<sup>マルタバン</sup>Martabanなどは、陶磁器を積み出した港名であって、陶磁器生産地ではない。それぞれ、青花磁器を中心とする肥前諸窯製品、福建の漳州平和県諸窯の青花磁器、ビルマ平野部の黒褐釉四耳壺などを指す言葉として、使用者側に伝わっている慣習的固有名詞となっている。

こうした、生産者と利用者間に流通・運搬者が介在することにより生じる情報の変化は、例えば、対馬藩の釜山におかれた倭館で、藩の管理下、対馬の陶工が朝鮮陶工とともに茶陶を生産し、“朝鮮茶陶”として、対馬藩が日本国内での贈答品などとして活用する現象などにも見ることができる。

また、朱印船貿易時代以降、茶陶において珍重視されてきた“交趾”焼きと“安南”焼き<sup>7)</sup>は、ともにベトナムを指す地域名であるが、交趾焼きとされる軟質多色陶の香合などは、福建漳州平和県で焼成されたことが明らかとなっている。興味深いのは、台湾の嘉義県の新港などで生産される多色陶が、近年

5) 渡辺、芳郎 2003年“近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流”『鹿児島大学法文学部紀要人文科学論集』: 89-106頁

6) 佐賀県立九州陶磁文化館 1996『土と炎-九州陶磁の歴史的展開-』

7) 西野範子 2011年“日本の伝世ベトナム茶陶~施釉陶器の分類、年代観とその歴史的背景~”『周縁の文化交渉学シリーズ1、東アジアの茶飲文化と茶業』163-200頁。



“交趾焼き”として主張・宣伝されていることである。おそらく、日本統治時代に交趾焼きとして誤って認識されたものが、根付いたと思われるが、文化交渉を考える上では興味深い事例である。

このような事例の背景には、陶磁器を生産するものには、使用者からの直接の情報は届きにくく、流通や販売を担う人たちが、その情報管理を行ったり、生産者と使用者の間の仲介を行うことが理解できる。

## 6. 異人から技術導入

例えば、“絵唐津”と呼ばれる唐津諸窯の鉄絵陶器は、釉薬の下に絵付けを行うもので、日本では唐津と美濃で天正年間には生産が始まっていると考えられているが、その出現はやや突発的であり、技術的系譜は明らかとなっていない。唐津の場合、秀吉に改易される前の領主波多氏が、松浦党の一族でもあり海外交易も行っていることから、同時代の朝鮮陶磁との近接性なども考えなくては行けないが、それを示唆する考古資料はまだ確認されていないようだ。

福岡県の高取諸窯、<sup>あかの</sup>上野諸窯、小石原諸窯など、鹿児島県の<sup>なえしろがわ</sup>苗代川諸窯など（薩摩焼き）が豊臣秀吉の朝鮮侵略時に、各大名により連行された朝鮮人陶工による技術導入を端緒として開窯していることは有名な史実である。

なかでも、1610年代に開窯した有田窯は、李參平（日本名：金ヶ江三部衛）らの朝鮮人陶工らによる泉山の陶石発見が契機となって、日本で初めて磁器の生産に成功したわけであるが、最初期から中国の景德鎮窯などと同レベルの青花磁器の生産に成功していたわけではない。また、青花の顔料（呉須・コバルト）自体は長崎経由の輸入品であった。初期の有田諸窯の青花磁器が、大きく品質の改良を遂げるのが1640年代であるが、その革新には長崎にいた中国人が関わっていると考えられている<sup>8)</sup>。この仮説は、有田猿川窯産の鉢や窯の辻窯産の皿に「三官」・「五官」等という文字が焼成前に書かれており、嬉野町吉田二号窯には「鄭□」などと書かれた製品が出土している。また文献資料や長崎に残る同時代の中国人墓誌に、林三官や呉五官などと記名されていることから、導き出されたものである。すでに『酒井田柿右衛門家文書』が伝える、中国人「志いくわん」（四官）より、伊万里商人がその製法を教わり、初代柿右衛門が「こす（呉須？）権兵衛」と一緒に製法を確立したとする由来と類似する部分もあり、興味深い。

## 7. 異人による価値転換

筑前朝倉郡の小石原窯の陶工らが住み着いて開窯した現大分県日田市の<sup>おんた</sup>小鹿田窯は、地元での陶器需要に応えるためのもので、大甕、蓋付き甕、半胴甕、茶壺、徳利、鉢、皿などの日常生活雑器類を生産していた、半農半陶の小集落であった。この集落に滞在した民芸運動で有名な<sup>やなぎむねよし</sup>柳宗悦が『日田の皿山』を著し、さらには英国人陶芸家 Bernard H. Leach も滞在し陶芸活動を行ったことなどにより、民芸品

8) 大橋康二・坂井隆 1994年『アジアの海と伊万里』新人物往来社

としての価値を高めたと言える。

価値の転換は輸入陶磁においても見ることができる。茶道の世界では“みたて”という言葉があるが、それは、日常生活で使われているものを、もともとの利用法とは切り離して茶道に使う道具として価値転換して利用することを意味している。例えば、“ハンネラ”と言い伝えられている素焼きの釜形土器があるが、これは現茶道界では、“こぼし”とって、余った湯を捨てる容器に利用されている。この土器の産地はタイであり、朱印船貿易時代に長崎などに運ばれてきたものである。タイでは炊事具（飯炊き釜など）として使われていたが、おそらく朱印船貿易時代にタイから輸入する商品の容器あるいはタイ系船員の船上生活具として長崎などに持ち込まれたものを転用したものであろう。同様に、北部ベトナムや中部ベトナムで生産された寸胴鉢、有頸壺などの無釉陶器が、南蛮貿易や朱印船貿易で日本にもたらされているが、これはベトナムでは日常の生活容器であるが、日本では茶道の花生けなどに転用され、貴重品化している。

## 8. 陶磁器生産伝統がない地域での窯業の興亡

窯施設などを伴う高火度焼成による陶磁器生産というのは、当時の高度な技術体系の一つであったと考えられる。従って、熟練した職人や彼らを養い、その生産品の需要を持つ社会組織がないと存在し得ない。また、仮にそうした高火度焼成の陶磁器の需要があったとしても、その需要が小規模で、移入品でその需要を満たせるのなら、在地での生産開始にアクセルがかからないことも大いに可能性がある。

例えば、古代から中世にかけての南西・琉球諸島は陶磁器生産がなかった地域が殆どであるが、南西諸島の徳之島にて11世紀後半から突如として、硬質無釉陶器“カムイヤキ”が生産され、14世紀前半まで続く。この“カムイヤキ”は、鹿児島県域から琉球諸島まで流通した容器（壺・鉢など）を中心とする日常生活用陶器であり、琉球列島の初期国家形成や農耕開始と絡めて議論されるようになってきている。

カムイヤキ窯址の構造が熊本県球磨郡錦町の下り山窯址の構造と類似することをもとに、本土の中世陶器の範疇のなかで、高麗系の陶器製作技術を取りこみ成立したことが予想されていた<sup>9)</sup>。しかし近年、高麗時代の窯址に類似した窯構造が発見され、製作技術的にも高麗陶器に共通点が多いこと、カムイヤキ・滑石製石鍋・中国陶磁器のセットが先島諸島までひろく確認されること、さらには滑石製石鍋や中国陶磁器などは博多商人などの九州北西部勢力が流通を握っていたと考えられることから、日宋貿易を担っていた人たちが高麗から陶工を招来して、開窯したとする仮説<sup>10)</sup>も提出されている。

当然こうした無釉陶器の在地生産は、徳之島を中心とする社会進化の問題と密接に関わっている。さらには、近年の喜界島の城久遺跡での大量の貿易陶磁や大型建築が確認されたことに結びついて、日宋

9) 吉岡康暢 2002年“南島の中世須恵器——中世初期東アジア海域の陶芸交流”『国立民族学博物館研究報告』94集：409-439.

10) 新里亮人 2004年“カムイヤキ古窯の技術系譜と成立背景”沖縄県今帰仁村教育委員会 編『グスク文化を考える』新人物往来社：325-352.

交易の延長線上に奄美諸島を位置づけ、交易の発展が琉球社会の国家形成に結びついた議論にも発展している<sup>11)</sup>。

また、14世紀前半にカムイヤキの生産が終結するという現象は、何を意味しているのでしょうか？14世紀後半以降、琉球では中国産を中心とする四耳壺や無耳壺の貿易陶磁の出土量が急増すること<sup>12)</sup>を鑑みれば、輸入陶磁器が市場を席卷したため、カムイヤキ生産の終結に向かわせたと理解することができる。

さらに、近世琉球において17世紀前半に首里王府近くの湧田窯などで、無釉陶器、施釉陶器が一斉に生産開始される現象も、外地からの技術導入がないとできないことである。すでに、このことは薩摩経由で朝鮮人陶工を導入したことが、文献資料側から論じられている。

## 9. 出土傾向から交易や流通、さらには文化や嗜好を推測する

陶磁器は、商品として運ばれる場合が多いので、量の多寡で議論を進めると見失うものがある。

厚い青緑釉とチョーク状の胎土をもつイスラーム陶器（9-10世紀が年代の中心で、壺が主要器種）は、その外的特徴ゆえ認識されやすい陶磁器であるが、日本では、殆どが北部九州での出土に偏り、それも博多の鴻臚館や太宰府政庁址や筑後国府跡などを中心としている<sup>13)</sup>。この分布は鴻臚館を中心とした当時の日中交易のルートにイスラーム陶器が乗っていたことを示す。珍しい出土品ゆえ、珍重品として日本にもたらされたものと早合点してしまいそうだが、この貿易陶磁としてのイスラーム陶器の分布が、東南アジアから中国（揚州で多く出土）にあることを理解すると、日本にもたらされたイスラーム陶器は、珍重品ゆえ商品として日本にもたらされたのか、あるいは中近東からの商品を入れた容器としてもたらされたのかなど、あるいは揚州などで容器として2次的に転用されたものが日本にもたらされたのかなど様々な可能性を考えなくてはいけないことが理解できる。

同様に、壱岐・対馬・博多は14世紀半ばのベトナム陶磁<sup>14)</sup>の出土分布の中心地となっている。これも広く分布を見渡すと、台湾海峡の澎湖諸島などに類例があり、同時期の琉球のグスク遺跡などに類例がないのを積極的に評価するなら、壱岐・対馬を根拠にした海上勢力（倭寇など）が、ベトナムから日本までの流通経路の一端を担っていた可能性を推測できるようになる。

また、琉球では首里王府を頂点に、各グスク遺跡からベトナム陶磁が一定量出土する。年代的には14世紀末あるいは15世紀初頭から15世紀後半に納まるものが殆どである。しかし、琉球の正史資料『歴代

11) 谷川健一 2007年『甦る海上の道・日本と琉球』文春新書。谷川健一編『日琉交易の黎明：ヤマトからの衝撃』森話社

12) 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008年“沖縄における貿易陶磁研究——14～16世紀を中心に——”『沖縄埋文研究』5：55-76。

13) 山本信夫 2002年“日本・東南アジア海域における9～10世紀の貿易とイスラーム陶器”『国立歴史民俗博物館研究報告』94：85-144頁。

14) Nishino Noriko 2002 Classification and chronological sequence of Tran Dynasty ceramics of Vietnam. *Journal of Southeast Asian Archaeology* 22：81-106.

宝案』は当時、安南との活発な通行は記録しておらず<sup>15)</sup>、暹羅（アユタヤ朝）、満刺加国（マラッカ）、爪哇国（ジャワ）、蘇門答刺（スマトラ）などとの活発な通行が記されるのみである。琉球で出土するベトナム陶磁は、青花・青磁・白磁のどれをとっても全て高級品といってよいものばかりであり、一般に流通するようなものが含まれていない。従って、それらがもたらされる背景には特殊な事情を想定しないとけない。おそらく、首里王府で最も多く出土し、しかも高級品ばかりであることを考えるなら、朝廷間レベルでの贈答品として捉えるのがふさわしいのであろうが、ベトナムの朝廷などから直接もたらされたものと限定する必要はないであろう。東南アジア島嶼部は一般にベトナム陶磁器の出土比率が高いことが知られるが、マラッカ、スマトラ、ジャワなどからの贈答品のなかにベトナム陶磁器が入っていたことは十分想定されよう。その一方、タイ陶磁は鉄絵などの施釉陶以外に、大量の四耳壺（酒瓶か）や若干ではあるが炊飯などに使われたと思われる釜形土器なども出土しており、タイとの直接の交易活動の結果であると思われ、ベトナム陶磁と対照的な存在となっている<sup>16)</sup>。

16世紀後半の年代を中心とする華南三彩陶器も九州を中心に出土している。高級施釉陶磁器が生産できない中世の日本にあって、唐物嗜好の一環で中国の青磁や華南三彩が珍重されていたわけであるが、こうした嗜好が日本での茶道の形成などと密接に関わってくる。例えば、村田珠光が愛用した中国青磁碗は、珠光青磁などと呼ばれている。一般に、茶道史の理解では、京都さらには堺などで、近世以降の茶陶にこだわる茶道が確立されていったという理解であるが、それは残存する文献資料から考えた場合の推測に過ぎない。つまり、量的に中国や朝鮮陶磁が豊かであった九州において、唐物嗜好がどのように確立され、どのような陶磁器の階層化が進んでいたものであろうか？可能性としては、九州で先に確立された唐物嗜好が、畿内に影響したことも否定できないはずである。陶磁器資料から考え直してみる必要があるのではないだろうか。

九州には西海岸域の博多や坊津をはじめ、中国人がかなり古くから居住していた都市や港が多く、現在でも“唐房”などの地名や媽祖信仰施設などとして各地で確認することができる。博多では、既に陶磁器の裏底面に、「丁」「大」「林」「王」「陳」「張」などと人名を墨書した陶磁器が多く出土し、「丁綱」「王綱」など当時の貿易運送を担った組織を書いた例もある。また、福岡県の津屋崎では、在自西ノ後遺跡で唐人居住区と考えられる遺跡も出土している。最近では、鹿児島県加世田小湊の当房からほど遠くないところで大量の陶磁器が出土する持鉢松遺跡の調査<sup>17)</sup>などもある。これは、長崎の唐人居住地区でも当てはまることであるが、異邦人が居住したことが明らかな遺跡においては、そこから出土する陶磁器や各種遺物の組成や特徴、あるいは家屋敷跡の構造や特徴などを、より細かく追求し、地元の人たちが居住する地区と比較することにより、異邦人居住区としての特徴を見いだすことができるのではないかと考える。もちろん、両者に差異がなければ、異邦人の適応居住も示すことにもなる。そして、そこでの経験則が、文献や地名などに反映されていない異邦人居住区同定にもつながると思われる。

15) ただし1424年以前の記述がないので、14世紀末から15世紀初頭のベトナム陶磁を考える基礎とはできない。

16) こうした推測の前提には、その当時、貿易相手国・地域にそれなりの豊かな陶磁器を生産していることが必要である。琉球との頻繁な貿易相手国があったスマトラ島、ジャワ島には、施釉陶生産伝統がなく、この思考法は当てはめられない。

17) 2003年『古代文化』55-2・3の特集号



## 10. 陶磁器は模倣されやすい：大明成化年製・広東碗・大清乾隆年製・宋古録

文化交渉学においては、文化の伝播ということがよく議論されるが、陶磁器を含めて手工業製品は模倣されやすいものであり、陶磁器の模倣は、文化伝播の一面をよく表している。

肥前では、1782年を少し遡る頃から、活発に“広東碗”と呼ばれる幅広高台で、濃みを使わない線描きのみの青花文様をもつ碗（蓋つきもあり）が生産されている<sup>18)</sup>。これは当時、長崎から輸入された広東産青花碗をモデルにしたものと考えられ、九州のみならず、江戸などの東日本にまで多量に流通している。名称自身も肥前における同時代資料から“広東碗”と呼ばれていることが明らかで、この碗が広東産であることを装うか、広東産を模倣したことを意識して生産されたようだ。ただし、この広東碗の模倣生産でもって、広東との文化・経済的關係に思考を及ぼすのは早計である。

身近なところでは、我々が日本で食べるラーメンの中華どんぶり（器面外側が赤彩されているものが多い）の底部裏面には“大清乾隆年製”といった紀年がプリントされているものがある。“大清乾隆年製”には、岐阜県瑞浪市の荻の島窯跡<sup>19)</sup>などで明治年間に生産されているものがあり、乾隆年号の偽紀年銘製品は、現在まで100年以上に亘って使われていることがわかる。こうした偽紀年は、大量生産品に付されており、商業的利益を狙ったものであることがわかる。

宋古録はタイのスワンカローク窯やシーサッチャナライ窯などで生産された鉄絵陶器が日本に輸入され、青磁陶器を、茶人などが貴重視し、茶器として活用したなかで、模倣品が、18世紀薩摩の堅野系諸窯などで生産されている。同様な現象は、安南写しとしてベトナムの青花や三彩陶器を、瀬戸窯（愛知県）や古曾部窯（大阪高槻市）などが、茶陶目的で生産している。これらが茶陶として、今に名だたる存在であることは、こうした模倣品が価値の媒介者として果たしてきた役割も大きいと思う。

## 11. おわりに

以上陶磁器の生産や流通の諸側面に焦点をあてて、文化交渉学的に留意すべきことを、幾つか述べてきた。その硬質不朽の性質ゆえ、日本においては、陶磁器は千数百年の歴史や文化を復元する有力な普遍的ツールである。その強みと弱みを理解した上で、積極的に研究資料として活用頂ければと願う次第である。

また、本稿では触れなかったが、幕末以降の陶磁器生産（特に有田や薩摩諸窯）は、殖産興業策とからまり欧米への輸出品を多く製造し、そこにも様々な生産や流通体制の変化を引き起こしている。陶磁器生産は当時の高度な生産技術であるから、権力者の管理や干渉を受けやすいし、その地域や社会が持つ技術力や技術観を深く反映していよう。技術と社会あるいは技術と文化といった視点での、窯業村や窯業生産機構の分析は、これから追求されるべきテーマと思われる。

謝辞：本稿執筆にあたって、橋口亘（坊津歴史資料センター輝津館）、中山圭（天草市教育委員会）、鈴木朋美（早稲田大学大学院）の各氏に資料入手等で大変お世話になった。記して感謝します。

18) 森本伊知郎 2009年、『近世陶磁器の考古学：出土遺物からみた生産と消費』、雄山閣、149-173頁。

19) 森浩一 2007年、『古代史おさらい帖——考古学・古代学課題ノート』、筑摩書房

